

信仰と観光をめぐる筑波山のあり方の変容 ー2010年代のパワースポット・ブームに着目してー

山城 聖蘭

2000年代に入ってから日本では、スピリチュアル文化が拡大しメディアで取り扱われる機会も増加した。特にパワースポットは、テレビ番組や雑誌で特集されるなど高い注目を集めている。茨城県においても様々な名所がパワースポットとして紹介され、多くの観光客が訪れている。特に筑波山は、昔から信仰や観光の山として人々に親しまれてきたが、近年は信仰と観光の二つの要素を含む「パワースポット」として紹介されている。

そこで本研究では、筑波山がいかなる経緯でどのように「パワースポット」として扱われるようになったのかを明らかにし、信仰と観光をめぐる筑波山の長い歴史のなかに近年の「パワースポット」としてのあり方をいかに位置づけるか、考察することを目的とした。調査方法としては主に、資料収集を実施した。対象とした資料は、全国紙や地方紙、地域資料、旅行雑誌、観光パンフレットなどである。

現在につながるパワースポット・ブームの直接的な契機は、2009年12月に放送されたテレビのバラエティ番組である。タレントの島田秀平が、明治神宮について「清正井を携帯電話の待ち受け画面にすると運気が上がりご利益がある」と紹介したことにより、大規模なブームが始まった。「パワースポット」という単語を国立国会図書館のデータベースや各新聞社のデータベースで検索したところ、2009年から2010年にかけてパワースポットに関する図書や雑誌、新聞記事が急増している。このような状況下で、筑波山は茨城県を代表するパワースポットとして書籍や旅行雑誌、観光パンフレットなどに掲載されていった。旅行雑誌『まっぷる』・『るるぶ』を分析したところ、筑波山におけるパワースポットに対する注目度が、2010年代前半では高かったのに対し、2010年代半ば以降はパワースポットを大々的に取り上げる機会が減少したことが窺えた。しかし、2016年の日本ジオパークの認定などにより筑波山地域への関心が高まったことで、観光パンフレットではパワースポットを取り上げ、分かりやすく筑波山の魅力を伝えるキャッチコピーとしてパワースポットを扱っていた。

また、筑波山の歴史を地域資料から調査した結果、古代から現代にわたる信仰と観光の度合いの変遷や、仏教や神道といった宗教的な側面からパワースポットというスピリチュアルな側面への変遷がみられた。どの時代においても、何かしらのご利益やパワーを得ようとする信仰と、遊楽を求める観光は同時に存在しており、現代のパワースポットに近い状況は古くから続いてきたと考えられる。今後も、信仰と観光が互いに作用しあって筑波山が存在すること変わらないが、近年は信仰と観光が衝突する事例もみられる。そのため、筑波山の神聖な一面を世に伝えながら観光の発信をし、筑波山を発展させていくことによって、地域の振興や歴史文化の継承に繋がっていくのではないかと考える。

(指導教員 横山 幹子)